

このように、プロレタリア歌人の作品に

は明確な反戦歌が見られたが、このような動きは必ずしも長くは続かなかったと思われる。反国家・反戦の歌に対する圧力は年を追うごとに強まり、プロレタリア系の機関誌も発売禁止、終刊、創刊を繰り返すことになった。そのような時代状況において、たとえば、坪野哲久でさえも、戦争を賛美する歌を詠んでいたことは、坪野荒雄『戦ひは勝つべきなれや』（雁書館、二〇〇二年）に詳しい。また、プロレタリア歌人ではないが、「満州への出動と建國に反対であったことが明らかである」（篠弘「戦争と歌人たち」「歌壇」二〇一五年七月号）とされる半田良平も、「大衆の興奮に巻き込まれず、個人的な視点を守ろうとしていた」一方、戦争を支持する歌も多く詠んだことが指摘されている（吉川宏志「個」を守るということ」「日本現代詩歌研究」第九号、二〇一〇年）。

以上のような反戦歌の限界は想像がつくところではあるが、それでも、ある時期までどのような限定的なものであったとしても、歌人がどのような歌を詠み得たのか、ある歌人の軌跡を見てみたい。

3. 矢代東村と日中戦争

一八八九年（明治二十二）に千葉県に生まれた矢代東村は、弁護士のプロレタリア歌人として知られる。一九一一年（明治四十四）より前田夕暮の「詩歌」に作品を発表し、一九三三年（昭和八）にプロレタリア短歌の雑誌「短歌評論」の創刊に加わり、選者となった。東村の戦時下の作品を見ていこう。なお、引用は『矢代東村遺歌集』（新興出版社、一九五四年）により、歌の「/」は改行を示す。

・だつて／あいつだつて／一べんだつて従軍したことはない。／ないのに、敵前渡河の壮烈さなど／歌つてゐる。
・人並に／万才・万才といへないから／たやすくいへないから／俺！
・旗だ。／提灯だ。／万才の声だ。／みんな小学一年生位の思考に／なる。

・いつか、／万才、万才の声におくられ／今日、遺骨、戦死者の遺骨。／無言のまま人々に迎へられ／帰らねばならぬ。

右の四首の初出は、三首目までが「短歌研究」一九三七年（昭和十二）十二月号に発表された「小学一年生位の思考に」、四首目は「詩歌」一九三八年（昭和十三）三

月号の「遺骨はかへる」より。

一九三七年の七月には盧溝橋事件が発生（日中戦争の開始）、翌月には国民精神総動員運動が開始された。十二月には反戦的な論文を発表したとして東京帝国大学教授の矢内原忠雄が職を追われ、人民戦線事件によって反ファシズム運動への弾圧が強まるなど、言論・思想への統制が強化されていた。

ここで詠まれているのは、戦場体験もなく、戦場への想像力の欠如した国民が「万歳」の声で戦場へ人々を簡単に送り出してしまうことへの批判だ。口語自由律で詠まれることで、その批判は鋭さを増している。
・大阪に来て／是非漫才だけは見ようとする。／この要求、ちつともをかしくない。
・どの漫才もどの漫才も／御用漫才、／拳国一致は先づ／漫才から。
・ノモンハンに／戦つたといふ帰還兵の／草を食つたといふ話／きいてゐる。
・静かに／心おちつけようとするものを／ことごとくに神経／たかぶりゆく。
・時代の英雄といふ言葉の意味／ヒットラーの風貌から／ぐいぐい／押し来るもの。